



百人一首かるた 江戸時代 小倉百人一首文化財団蔵



勸学院址の石碑

雀塚

第七号 平成28年10月1日 藤原実方と更雀寺(雀寺)

小倉百人一首「かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしも知らじな もゆる思ひを」(注-1)の作者として知られる藤原実方朝臣(ふじわらのさねかたあそん)は平安中期の歌人で、藤原公任(きんとう)、紫式部などと共に中古三十六歌仙のひとりとして数えられる。

実方は左大臣藤原師尹(もろただ)の孫であり、清少納言との恋愛贈答歌を残し、また光源氏のモデルのひとりとも言われる貴公子であった。しかし正暦(しょうりゃく)六年(995)正月に突如陸奥守(むつのかみ)に任じられ、同年9月に奥州へ下った。

鎌倉前期の説話集『古事談』は、実方と藤原行成が殿上で口論となり、その時実方が行成の冠を取って小庭に投げ捨てるという乱暴をはたらいた。この様子を小薨(こじとみ)(格子造りの窓)からご覧になっていた一条帝は「歌枕みてまいれ」と実方を 陸奥守(むつのかみ)に任じたと、その左遷の経緯を記している。それから僅か3年後の長徳四年(998)、実方は帰洛の勅許を待ちながら雪深い任地で歿した。

その後、実方の強い望郷の思いは“雀”と化して、神泉苑の西側にあった勸学院の森(現在の中京区西ノ京勸学院町)に飛んで来たという。勸学院は藤原氏累代の教育機関であり、後にその跡地に森豊山更雀寺(しんぼうざんきょうしゃくじ)が建てられた。寺は江戸時代に四条大宮の西北(中京区錦大宮町)に移り、更に昭和52年に現在地(京都市左京区静市市原町)に移転した。更雀寺の境内には「雀塚」と彫られた小さな碑があり、この不運な平安貴族の伝説を今に残している。

京都の人々は藤原実方ゆかりの更雀寺を、親しみを込めて「雀寺」と呼ぶ。

(注-1)「こんなにもお慕いしているということだけでもあなたに伝えたいのに、伝えられない。あなたはご存じないでしょうね、伊吹山のさしも草のように燃えている私の思いを」

※さしも草というのは、お灸の原料となる“よもぎ”の別名です。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

特別顧問 坂本 孝志